

# 周作クラブ会報

(第31号)  
2008年6月15日発行

周作クラブ

### ◆主な記事◆

- 遠藤周作文学館新企画展 (1面)
- 遠藤文学・原亮の旅報告 (2面)
- 原稿再録『深い河』 (4面)
- 遠藤周作映像集 (6面)
- 特別喜劇我師 遠藤周作 (10面)

遠藤周作文学館

## 新企画展「遠藤周作とフランス」開催

2008年5月18日から、遠藤周作文学館（長崎市東出津町）で新しい企画展「遠藤周作とフランス」が始まった。今年で開館9年目を迎える同文学館では、5回目となる企画展のテーマを「フランス留学時代」とし、新発見の資料などを展示して遠藤文学の原点に迫る。会期は2年。



テープカット・中央が長崎市長

新企画展の開会式は、田上富久・長崎市長の挨拶で始まり、ついで遠藤順子夫人が資料寄託者として登壇、市長の言葉を受けて「長崎からいただいた

そのご縁に、主人も感謝しているはず」と話した。そしてテープカットの後、第5回企画展の記念対談が文学館内のホールで行われた。仏文学者で慶應義塾大学名誉教授の高山鉄男氏と、作家で三田文学編集長の加藤宗哉氏による対談では、遠藤文学にとってのフランス留学の意味が語られ、留学時のさまざまなエピソードも報告された。

遠藤周作のフランス留学は、1950年夏（27歳）から、病気で帰国する1953年1月（29歳）までの約2年半だった。西洋の思想・文化に触れ、カトリック文学を学ぶ留學生生活で得られたものは、まず何よりも西洋との隔たりであり、以来、「日本人としてのキリスト教」が遠藤文学の中

心的テーマとなっていく。

この留学時代に焦点を当てた今回の企画展のなかで注目されるのは、やはり昨年発見された遠藤宛の百通を超える書簡。母親・遠藤郁からの、「毎朝ミサで一生涯命周の成功を祈つてみます（略）周ちゃんか帰るまでに周作を有名にしておきますから」という手紙や、不仲とされた父親・常久からの病気を案じる手紙、さらには兄・正介からのユーモア溢れた激励の手紙など、家族の愛情によって支えられていた遠藤の留學生生活がしのばれる。

また一方で、リヨンやパリでのフランス人大学生との交友についてもその



新企画展を見る会員たち

詳細が紹介され、遠藤が留学最後の三日間をともしに過ごしたソルボンヌ大学哲学科のフランス人女子学生フランソワーズ・パストゥールとの、悲しい結末に終わる交際の一端も目にする事ができる。



フランスの遠藤周作を語る高山先生(左)と加藤氏

この恋愛事件が象徴するような、遠藤周作が体験した「へどうにもならない西洋との隔たり」こそが、今回の企画展「遠藤周作とフランス」の底に秘められたテーマだろう。遠藤文学の原点を考えるうえで貴重な展示となっている。

遠藤周作文学館では2年ごとに新しいテーマによる展示を行っているが、今回の「遠藤周作とフランス」では特に展示室Ⅱで長崎の教会群が紹介されている。『女の一生』にも描かれた大浦天主堂をはじめとする長崎の多くの教会は、フランス人神父の設計によって建てられており、その点でも、遠藤文学とフランス、そして長崎のつながりがしのばれる。

(写真)宮辺 尚・梅田和子